

ハンドボール競技におけるサイドプレイヤーの  
評価方法に関する研究  
—サイドシュートに着目して—

小松 大 (小学校課程・保健体育副専攻)

「序論」動機・目的・方法

本研究では、サイドプレイヤーの運動を質的な側面からとらえ、評価していく方法を模索していこうとしたものである。第38回全日本ハンドボール選手権大会決勝(仙台)における後藤康之選手(名城大学右利き)と、第17回東日本学生ハンドボール選手権大会における著者のプレーをVTRに収録し、運動学的視点からの事例研究として、有効な質的評価方法を明らかにしていくものである。

「本論」第1章 ハンドボールゲームにおけるゲーム分析

現在、ハンドボールに限らず、さまざまな球技種目においてスコアシートなどを用いて、数量的に記録していく方法が取られている。これにより、攻撃回数や、成功率、ミス率などといったことが数字として記録され、チームや個人の反省点が明らかにされてくるといえる。しかし、数量的な把握だけでは運動がどのように行なわれたのかということは、明らかにされない。そのため運動の質的な評価が必要であるが、これは現在日本ではあまり行なわれているとはいえない。

第2章 運動学的視点によるハンドボールのゲーム分析

運動を質的に明らかにしていく際に不可欠なものとして「印象分析」がある。しかし「印象分析」を行なうには、その運動の豊富な運動経験や、運動を見抜く力、そして運動共感の能力が必要である。また、自分の目で観察していくものであるため、客観性に乏しいものとなる恐れがある。そこで、Meinel, k. によって規定された諸カテゴリーを用い、運動学的な視点から観察すること、映像機器による観察などを行なうことにより、科学的にも客観性のある分析を行なうことが必要であるといえる。

第3章 ゲーム分析における質的プレイヤー観察の実際

プレイヤー観察にも、数量的な観察と、質的な観察があるが、本研究では質的な観察に焦点を絞って行なった。観察を行なう際に、諸カテゴリーのなかの「運動の局面構造」と、「運動の先取り」を特に重要視した。事

例として、全日本インカレにおける後藤選手と、東日本インカレにおける著者のプレーを、セットオフェンス時のサイドシュートに着目し、典型的なものを分析した。その印象分析の結果、両者共に、「運動の先取り」による運動局面の融合がはっきりと認められたが、さらに印象分析を考察してみると、後藤選手には、著者にはないコーナーの位置取りからのシュートを得意としていること、ディフェンスに対する上体の使い方が優れており、踏み切りの際に運動学的にも、調和の取れた無駄の少ない運動が行なわれていたことが確認できた。

「結論」 1、 サイドプレイヤーの有効な評価方法について

球技種目一般にスコアシートを用いた数量的な記録・評価は現在定着しつつあるといえる。しかし、その結果に対するプレイヤー個々人の姿勢が問われていく必要があるのではないだろうか。数量的に明らかになったことは、数字として明らかになっているもので、それ以上でもそれ以下でもない。その数字からより多くのことを把握するには指導者やプレイヤー自身の姿勢が重要になってくるといえる。それに対して「質的な把握」はほとんど行なわれてはいないのが現状である。球技は对人的な要素が大きく、運動行為も複雑で、多面的であるといえる。そのために運動を質的にとらえていくことは、困難であることは事実である。また、これまで客観的な評価基準が無かったことも、質的分析が一般的に定着していない理由であろう。しかし、Meinel, k. の諸カテゴリーから分析することにより、十分に客観的な評価が可能であり、特に指導者には運動経験(主観)を土台とし、理論(客観)的な評価による理想的な運動の模索が必要となってくるのではないだろうか。

2、 質的評価の今後の課題

本研究は「印象分析」を基に行なったが、これは「他者観察」と呼ばれるものである。これと同時に「自己観察」を用いて観察を行なったならば、より深く運動を研究できたであろう。また、球技の構成要素は複雑であり、シュートだけではその構成要素の一部分だけを評価したに過ぎない。ディフェンスやオフェンスの1対1、パスやドリブル、フォローやフェイントなど、「運動」に対する総合的な評価と、数量的評価と質的な評価を補完させながら行なうことが理想的であるといえる。—引用・参考文献—